営業概況（2022年4月）

4月の債券相場は、前月末に実施された連続指値オペや買入オペの増額を受けて、買い先行で始まり、10年365回債の利回りは0.200%まで低下した。債券先物6月限も一時150円14銭まで上昇する場面があったものの、3月米国雇用統計の堅調な結果を受け、今後の利上げペースの加速が意識されて金利上昇に転じた。3月米国CPIの伸び率が市場予想を下回ったことをきっかけに、押し目買いが入り一旦相場は下げ渋ったが、FRB高官の5月FOMCでの0.5%利上げに前向きな発言を受け再度売りに転じて、19日には10年366回債の利回りは、指値オペ実施水準である0.250%を付けた。米国長期金利が2.9%台まで上昇し、21日に債券先物6月限が一時148円98銭まで下落すると、指値オペが通告されたが、売り圧力が依然として強く同日夕刻に21日～26日にかけての連続指値オペ実施が通告された。その後、中国での新型コロナウイルス感染拡大懸念から世界経済への先行き不透明感が強まり、超長期債は反転して買い優勢となったが、指値オペ対象の長期債は動意が乏しく、0.250%を下値に狭い範囲での売買が続いた。28日の日銀金融政策決定会合で原則毎営業日指値オペが実施されることが決まると、長期債含め幅広い年限で買い優勢となり、10年366回債の利回りは0.215%で今月の取引を終えた。

＜短国市場＞

3M金利は-0.09%台でスタートしたがGC金利の低下に連れて-0.1%前半となり、月後半は投資家需要により売りが見え難い地合いとなった。1日の3M1070回債入札の最高落札利回りは-0.09%台となったが、GC金利の低下に伴って8日の3M1072回債は-0.11%台となりセカンダリーは-0.13%台を中心に推移した。22日の3M1076回債は-0.11%台だったが、セカンダリーでは需給が引き締まり-0.14%～-0.15%台買い気配で終えた。6M金利は国庫短期証券買入オペに支えられ一時-0.13%台まで低下したが、21日の6M1075回債では-0.09%台に上昇した。月後半には需給が回復し-0.11%台の気配で取引を終えた。1Y金利は6Mに連れて月半ばは-0.12%～-0.11%台で推移したが、19日の1Y1074回債は2年債に連れて-0.06%台に上昇し最終的に-0.097%で取引を終えた。

＜一般債市場＞

10年地方債は国債カーブ+6.0bp、5年地方債は同+5.0bpとスプレッドが維持され、利率も国債金利の上昇により高利率となったことから需要は旺盛だった。既発債はボラティリティが高い環境の下、先行き不透明感は払拭され難かったが、需給の緩みには繋がらなかった。社債は電力会社各社の起債が全体の6割弱を占め、発行額は前年同月対比で1,632億円減少したものの月間1兆1，680億円と4月としては高水準だった。SDGs債関連では、大林組が発行体として初めてサステナビリティ・リンク・ボンド（目標未達成時寄付型）を発行し順調に消化された。

◎　主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#366	0.205(5日)	0.205(5日)	0.250(19日)	0.215(28日)
#365	0.205(1日)	0.195(5日)	0.250(20日)	0.225(28日)
#355	0.100(1日)	0.100(1日)	0.180(20日)	0.120(28日)
#150-151 (5Y)	0.010(1日)	-0.005(28日)	0.035(6日)	0.000(28日)
#179-180 (20Y)	0.600(1日)	0.600(1日)	0.795(22日)	0.740(28日)
#1068-#1075 TDB(6M)	-0.092(7日)	-0.131(11日)	-0.085(21日)	-0.090(21日)
#1070-#1076 TDB(3M)	-0.091(1日)	-0.137(11日)	-0.091(1日)	-0.107(22日)